国語

（国1～国13ページ）

※数学②の問題は、本冊子の左開きのページにあります。

注意

1　試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。

2　この問題用紙には、次の二科目の問題が収められています。

国　語（国1～国13ページ）

数学②（数1～数11ページ）「数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学Ⅲ・数学A・数学B」

3　二科目の中から一科目を選択し、解答は解答用紙にマークしなさい。

解答用紙は、二科目共通です。

解答用紙にはマーク式解答欄の番号が 1 ～ 75 までありますが、使用しない解答欄も含まれています。

4　解答用紙に受験番号・氏名・選択科目を記入しなさい。

受験番号と選択科目は、下記の「受験番号欄記入例」「選択科目欄記入例」に従って正確にマークしなさい。

5　試験時間は **六〇分** です。

6　試験開始後、問題用紙に不備（ページのふぞろい・印刷不鮮明など）があったら申し出なさい。

7　問題の内容についての質問には、いっさい応じられません。

8　中途退出は認めません。試験終了後、この問題用紙は持ち帰りなさい。

受験番号欄記入例・選択科目欄記入例

受	験	番	号	欄
H	5	7	0	9
Ⓐ	⓪	⓪	●	⓪
Ⓑ	①	①	①	①
Ⓒ	②	②	②	②
Ⓓ	③	③	③	③
Ⓔ	④	④	④	④
Ⓕ	●	⑤	⑤	⑤
Ⓖ	⑥	⑥	⑥	⑥
●	⑦	●	⑦	⑦
Ⓙ	⑧	⑧	⑧	⑧
Ⓚ	⑨	⑨	⑨	●
Ⓛ				
Ⓜ				
Ⓝ				
Ⓟ				
Ⓡ				
Ⓢ				
Ⓣ				
Ⓤ				
Ⓥ				
Ⓦ				
Ⓧ				

アルファベットと数字の位置に注意してマークしなさい
（アルファベットのI・O・Qはありません）

「国語」を選択した場合

選	択	科	目	欄
●	国			語
○	数		学	②

↑
解答する1科目に
必ずマークしなさい

マーク式解答欄記入上の注意

1．解答は，HBの黒鉛筆を使用して丁寧にマークしなさい。

《マーク例》

良い例 ●

悪い例 ◍ ◐ ⊗ ◯ ○

2．訂正する場合は，プラスチック消しゴムで，きれいにマークを消し取りなさい。

3．所定の記入欄以外には，何も記入してはいけません。

4．解答用紙を汚したり，折り曲げたりしてはいけません。

I

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

夏目漱石はその『文学論』の土台となる理論を「F＋f」の図式で提示した。

「F」は焦点的印象もしくは観念、「f」はこれに付着する情緒として、漱石はボウトウ[a]で説明している。英語にすれば、「F」はfocus、「f」はfeelingのそれぞれの頭文字である。なるほど英語で考えれば「f」と「F」の関係の理解は容易である。

feelingは、われわれが感じるところの感覚的入力情報のすべてである。その一つは外界が感覚器官に与える情報すなわち感覚与件である。二つ目は（それにともなって発生することもあるが）精神内部に自ずから生じ、感受される気分、情緒、印象である。外部からもたらされるか、精神内部から生じるかの違いはあっても、［ア］、これらは刻々、感受されている＝感じている（feelされる）ことでは同じである。

一方の「F」は、焦点的印象もしくは観念であると漱石が説明した通り、この刻々とバラバラに感受される無数の情報「f」、その組織されざる感覚情報、印象の集合を統合し、焦点を与えるものである。焦点を与えられることによって、それらの情報はひとつの像として統合される。観念とはこうして、サンマン[b]で分散的な感覚の群れをなにものかの表象として焦点を絞る＝統合する作用を持つ。こう考えるなら、漱石の「F＋f」の図式は極めて整合的に理解できる。すなわち「F」は「f」の群れに焦点を与える、つまり統合する働きを意味する。が、このような理解に基づけば、むしろ漱石の示した図式は「f→F」あるいは「f（1,2,3……n）→F」という表記にしたほうが適切なように思える。あるいは「F」つまり観念が先行し、それが感覚の群れに焦点を与える、すなわち［A］が感覚に篩（ふるい）（フィルター）をかけ情報を絞り込む作用を持つとも考えるならば、矢印の方向の違いは観念が先行するのか、あるいは焦点は無数の感覚の群れから事後的に発生してくるのか、という問題になろう。（中略）

にもかかわらず、[1]漱石が「f→F」ではなく、「F」と「f」を並列して、「F＋f」としなければならなかったのはなぜか。それはこの論が言語を用いた表現の分析であり、またその理論すなわち文学論であったからに他ならない、と考えられる。いうまでもなく文学は言語、すなわちあらかじめ共有された言葉＝単語を用いる（絵画においては図像にあたる）。そこで用いられる個々の言葉は、一定に絞り込まれた意味対象（領域）を示すものとして受け取られる。その単語が何かを有意しているという前提が、その単語が言語として機能していることである。つまり言葉は記号として、何かをすでに指示している。すなわち焦点（つまり［B］）を備えた意味作用を持つ。

言語を用いる文学においても、当然そこで用いられる個々の単語はそもそも「F」の機能をあらかじめ保持していることを前提とする。［イ］科学的言説は意味＝焦点の絞られた「F」のみで明確に文を構成しようとするだろう。だが、文学はその条件として、「F」に付着する情緒「f」がヒッス[c]である。文学は単語の確定的な意味に対する主体の感情を付加するというわけだ。

しかし、個々の単語はすべからく「F」すなわち観念を示しているのであれば、「f」すなわち感情の表出はいかに可能になるのか。［C］は個々の単語ではなく、この単語と単語の連結の様態、基本は同じ意味内容を伝えている文の異なる言い回し、様相（モダリティ）、文体として示される。いわば言い回しの違いによって、文学は、物語られている同じ対象、事実＝「F」に対する、それを語る人の位置、距離、視点の違い、それにともなう驚き、感嘆、躊躇（ちゅうちょ）、動揺、悲しみ、疑い、怒りなどの差異までをも提示するということになろう。

こう考えると、漱石が「F＋f」の連結として文を把握する図式は、本（注1）居宣長（1730−1801）そしてその息子の春庭（はるにわ）（1763−1828）、弟子の鈴木（すずき）

朗（1764−1837）と国学において文を「詞」と「辞」の連結として捉えてきた理論の伝統を継承しトウシュウしているともいえる。遡れば鎌倉末期に著された（かつては藤原定家の作とされた）『手爾葉大概抄』（注2）に端を発し、漱石の『文学論』ののちには、一九三〇年代後期に時枝誠記（注3）（1900−67）がいわゆる「言語過程説」において、「詞」と「辞」理論として洗練、完成したとみなされる文法論である。時枝に則して簡略して述べれば、詞と辞の区分は、日本語表記に含まれる漢文、仮名など表記方法の複数性、階層に対応させられる。たとえば、

子曰　誦詩三百　授之以政不達　使於四方　不能専對　雖多亦奚以為

（「論語」子路第十三―五）

この漢文は以下のように読み下され日本語表記される。

子曰く、詩三百を誦すれども、之に授くるに政を以てして達せず。四方に使いして専対すること能わずんば、多しと雖も亦た奚を以て為さん。

日本語表記において、漢語と漢語の語順がしばしば入れ替えられるのみならず、そう把握された関係を補うように、「かな文字」による送りが付加されている。ここで漢字が表記しているのは概念であり、その概念と概念の繋がりを日本語文法に合わせるべく調整、解釈する働きを付加した「かな文字」が行なう。「詞」とは漢字に表記された概念であり、この「詞」＝漢字の連結が作り出す文意に対して、「辞」とはその文意をどう読み取るか、受け取るか、その意味に対する（感情的な反応を含めた）主体的態度をととのえ、表明するために付加される補助具である（「かな文字」によって示される「辞」を「てにをは」と呼ぶのは、文字通り、器につけられた取っ手＝「手に把」に見立てられたからである）。

輸入された（つまり輸出可能な）漢文が、ある意味普遍的な意味を伝えるとすれば、「辞」はその意味を日本語環境に受け入れやすく、とっつきやすくするためにカスタマイズする付加物、仕掛けである。付加物は意味の構造そのものを変えないが、それに対する主体的態度、感情的な負荷を代表し示している。時枝誠記の「言語過程説」はゆえに、日本語の文はそれを言葉の意味ではなく、その文をどう使用しているのか（使っているのか）、語り手とそれを受け取るものとの関係、言語行為がスイコウされている場における過程そのものを示すと唱えた。

ウ　本居宣長の理論は、若き夏目漱石が集中的に研究していた荻生徂徠（注4）（1666−1728）の古文辞学を受けていた。ここで徂徠の理論を敷衍すれば、漢語に示されている概念「F」は、絶対的に確定的なものであるが、同時にいかなる読み手によってもそれには直接到達できない、とみなされなければならない。いわば遠近法における焦点がそうなように、漢語の示す概念は、到達できない無限遠（注5）に確定的に存在するのである。そこに焦点を合わそうとするから、視るという知覚は働きうる。同じく、読むという行為も成立する。それが到達不能だとしても、決して読みはでたらめなものにはならない。むしろその無限遠を志向することによって読みは統整されるのである。すなわち徂徠にとって漢語に示されている「F」は外部（とりあえず、人間を超えた先人＝聖人とみなすべきだと、徂徠は考える）からすでに与えられた所与、無限遠である。言語を学ぶことは、このすでに与えられているはずの文の焦点「F」（無限遠としての「F」）に読み手自身の理解を一致させていく営為にほかならない。漱石の課題、人の意識がいかに一つに統制されるのかという問題に重ねれば、意識の統制は、このあらかじめ外在的に与えられた「F」、文字によって可能になるということになる。

漱石の「F＋f」の図式は、こうした国学から展開した「詞」と「辞」の図式にそのままパラフレイズできる。が、一方で漱石は宣長以来

の国学とは異なり、この構造を日本語の固有性に還元しなかった（そこに漱石の革新性がある）。漱石はこれを同様な主題、対象に対する、さまざまな語り方の差異すなわち文体の差異、より普遍的に、現象学的な様態の差異すなわち対象とそれに対する主体の関係（ときにその関係を昇華することを含む）そのものの差異を示していると考えたのである。

（岡崎乾二郎『近代芸術の解析　抽象の力』による）

（注）1　本居宣長――江戸時代の国学者。
2　手爾葉大概抄――鎌倉末期から室町初期に成立したとされる語学書。
3　時枝誠記――近現代の日本語学者。
4　荻生徂徠――江戸時代の儒学者。
5　無限遠――写真用語でピント調整が不要となるほど限りなく遠いこと。

＊問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問一　傍線部a～eを漢字表記に改めた場合、それと同じ漢字を傍線部で用いるものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

1　a「ボウトウ」
① ジンボウの厚い人物。
② 不正をボウカンする。
③ 内閣カンボウ長官に就任する。
④ 未開の地へのボウケン。

2　b「サンマン」
① マンガ家を目指す。
② マンメンに笑みを浮かべる。
③ 自身のタイマンを恥じる。
④ キョマンの富を得る。

3　c「ヒッス」
① 川のナカスに立つ。
② スガオをさらす。
③ キュウスで茶を入れる。
④ フルスにもどる。

4　d「トウシュウ」
① 人がサットウする。
② オントウな手段をとる。
③ トウシン大の姿。
④ ブトウ会で踊る。

5　e「スイコウ」
① 犯罪をミスイで防ぐ。
② 一人暮らしでジスイする。
③ 本文をバッスイする。
④ 栄枯セイスイの物語。

問二　二重傍線部X・Yについて、問題文中での意味として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

6　X「敷衍」

① 要点をまとめること
② 詳しく説明すること
③ 広く人々に知らせること
④ もう一度繰り返すこと

7　Y「還元」

① 問題点を指摘すること
② もとにもどすこと
③ 同じ状態にとどまること
④ もとの状態を重視すること

問三　空欄ア～ウに補う言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

8

① ア　したがって　イ　たとえば　ウ　さらに言えば
② ア　しかし　イ　言い換えれば　ウ　ところで
③ ア　いずれにせよ　イ　たしかに　ウ　そもそも
④ ア　結局のところ　イ　もちろん　ウ　ところが

問四　空欄A～Cに補う言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

9

① A「F」　B「F」　C「f」
② A「F」　B「f」　C「f」
③ A「f」　B「F」　C「F」
④ A「f」　B「f」　C「F」

問五　傍線部1「漱石が『f→F』ではなく、『F』と『f』を並列して、『F＋f』としなければならなかったのはなぜか」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

10

① すでに焦点化されて確定的な意味を持つ単語からなる文に、情緒が付着していることが文学の条件だったから。
② 言語を用いた表現のためには、分散的でバラバラな感覚の群れに、フィルターをかけて情報を絞り込む必要があったから。
③ 文学においては、バラバラに感受される無数の情報が、あらかじめ共有された言葉＝単語に先行していると考えられたから。
④ 外界が感覚器官に与える情報は、文学においては言語として共有されている言葉＝単語に相当していたから。

問六　傍線部2「『詞』と『辞』理論」とはどのようなものだと問題文で述べられているか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

11

① 「詞」である漢字を、「辞」であるかな文字が連結することで文意が形成されるとする理論。
② 「詞」が漢字の意味を表し、「辞」がその漢字の語順を日本語文法に合うように入れ替えているとする理論。
③ 「詞」が文の意味を伝え、「辞」がその意味の構造に対する主体的な態度を表しているとする理論。
④ 「詞」は漢語としての漢字の概念を、「辞」は日本語としての漢字の概念を表しているとする理論。

問七 傍線部3「読むという行為」とはどのようなものだと問題文で述べられているか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

12

① 確定的な文意には到達できないため、それ自体が不可能な行為。

② 焦点としての概念「F」が意味するところを理解する行為。

③ 読み手自身の解釈にもとづき、一歩一歩理解を積み上げていく行為。

④ 絶対的に確定している文の意味へと、焦点を合わせていく行為。

問八 問題文の内容と合致するものを、次の中から一つ選びなさい。

13

① 漱石は「文学論」を論じるに際して「F＋f」という図式を提示したが、それは漱石が若いころに学んだ国学の「詞」と「辞」の理論とまったく同じものだった。

② 漱石は「文学論」の土台として「F＋f」という図式を提示したが、それは荻生徂徠以来の国学の理論を意識の統制という自身の課題へと応用したものだった。

③ 漱石の「F＋f」という図式は、国学の「詞」と「辞」の理論を日本語以外のすべての言語へと当てはめるという自身の課題に取り組む中で生まれてきたものだった。

④ 漱石の「F＋f」という図式は、本居宣長以来の「詞」と「辞」の理論を継承したものではなく、荻生徂徠の無限遠に関する古文辞学を発展させたものだった。

Ⅱ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

知性はしばしば寝た子を起こす働きをする。教育が普及するにつれて、今まで従順であった子供が反抗をはじめて困るという親のなげきが聞えてくる。それはかえらぬ昔を恋うる愚痴のひびきをおびている。筋道だってものごとを考える力ができてくると、今まで何とも思わずにしてきたことが急に変だと気がつく。やがて世の中には不合理なことがやたらに多いように思われてくる。不合理なことに敏感になり、強く反発するようになる。X相当な教育をうける機会にめぐまれた人なら誰でも、程度の違いはあっても一度は[1]こういう時期を通過する。問題はむしろそれから先の変化の仕方にある。

せっかく目ざめた知性をまた眠らせてしまう場合もある。人間世界はどうせ［ア］どおりいかないのだと簡単にあきらめてしまうこともあろう。人間の知性では測り知れない何ものかがある、それを信じそこによりY どころを求めるというようになることもあろう。

一たん目ざめた知性がいつまでも最初の鋭敏性を保つ場合もある。そういう場合には、しばしば知性は尖鋭（せんえい）に働くだけで成長がとまってしまうことがある。不合理な点を目ざとく見つけるが、［Ⅰ］にかけていることになる。

この世の中に不合理と思われることがたくさんあるのは否定できない事実である。しかしそういうものが存在していることにはそれぞれ理由があるであろう。[2]理由があるということは、それが正当化されるということと同じではない。しかし正当化されると否とにかかわらず、ある事柄がこの世に起る理由を知ろうとするのが知性の働きである。そういう働きを通じて知性が成長してゆくことも改めていうまでもないであろう。

「カラマゾフ兄弟」（注）の中に出てくる人物の多くはうそばかりついている。うそをつかないアリョーシャやゾシマ長老の方がむしろ例外的存在である。他の多くの人物は困った人たちである。現実に自分たちの周囲にいてほしくない人たちである。しかし「カラマゾフ兄弟」からうける深い感銘はちょっとほかに［イ］がない。汚れた人たちのひきおこすいとわしい事件の連続を読みながら、[3]自分の心の奥底から洗われたようなすがすがしい気持になる。

自然科学の中でも特に理論物理学の目標とするところは、自然現象の奥にある合理性の発見である。十九世紀の終わりまで物理学者は光が波であることをZ ひたむきに信じていた。二十世紀になって光は粒子の集まりであるという説が出てきた。十九世紀の物理学者たちは、光が粒子だという考えは間違いだとして、とっくの昔に捨ててしまっていたのである。波であることが本当なら、粒子であるというのはうそのはずである。粒子であるという説を復活させるなら波動説はひっこめなければならない。実際はしかし、光は確かに波だと思われるふしもあり、［Ⅱ］のである。二十世紀の初めの二十年あまりの間、物理学者たちはこの矛盾になやみぬいたのである。結局量子力学という新しい理論体系ができて、光も物質もどちらも波動・粒子の二重の性質を持っているという［ウ］な事態を、合理的に理解できるようになったのである。理論物理学はそれで一応の解決に到達したのである。ある範囲内の自然現象の合理性が把握されれば、それで一応満足してよかったのである。理論物理学者の創造的活動の中で一番大切なのは、ある観点から見て不合理と思われる事柄の奥底にある合理性を見つけだすことである。そのためには新しい観点へ飛躍的に移ることが必要であった。はじめから合理性のはっきりしているような対象ばかりあつかっている限り、一番大きな創造力の発揮される機会はないのである。

人間世界のできごとに対しても、一見きわめて不合理と思われることがらの奥に、人間の存在の仕方のある必然性を洞察するところに、知性をふくめた人間精神の創造的活動があるであろう。かつて私が「カラマゾフ兄弟」からうけた感銘が、理論物理学の独創的著作からうけた感銘と共通す

るものを持っていたことも、理由のないことではないであろう。

しかし人間世界の出来事の場合には、合理性とか必然性とかを見出すところで問題は終るのではない。そこでの一番大きな問題は常に人間の幸福である。自分の幸福が問題であり、他人の幸福が問題である。何を幸福と感じるかは知性だけの問題でないことはもちろんである。知性が容易に合理的に把握することのできない人間の感情とか情緒とかいわれるものの方がより直接に幸福につながっているのである。[4]知性がまだ気づかずにいる潜在意識の働きが、そこではしばしば決定的な意味を持ちうるのである。

しかしこういう事情があるからといって、人間の幸福の問題に対して知性が無力だということにはならない。知性は成長し深化しうるところのものである。知性が自らを深めることによって、逆に人間性のより大きな領域を知性の面まで浮かびあがらせることができるのである。このような努力が人間の幸福の問題と密接につながっている。外なる世界へ向かっての科学の探究の進展が知性の深化によって裏づけられていないなら、[5]新鋭の武器を持った野蛮人ができあがるだけであろう。

（湯川秀樹『湯川秀樹　詩と科学』による）

（注）「カラマゾフ兄弟」――ロシアの小説家フョードル・ドストエフスキー（一八二一～一八八一）の最後の長編小説。「カラマーゾフの兄弟」と同じ。

問一　傍線部X～Zについて、問題文中での意味として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

14　X「相当な」

① ある程度十分な
② わずかながらでも
③ 分相応な
④ 長期間にわたって

15　Y「よりどころ」

① 自分らしさ
② 宗教的な信条
③ きずな
④ 心の支え

16　Z「ひたむきに」

① 誰に言われることもなく
② いちずに
③ 一人で
④ 当たり前のように

問二 空欄ア～ウに補う語句として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

17 ア ① 予想 ② 理屈 ③ 願望 ④ 思惑

18 イ ① 比類 ② 言葉 ③ 方途 ④ 分類

19 ウ ① 低俗 ② 広範 ③ 斬新 ④ 奇妙

問三 空欄Ⅰ・Ⅱに補うものとして最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

20 Ⅰ
① 建設的な意見をつくりあげる力
② 合理的な観点に立って説明する力
③ 誰もが納得できる意見を提示する力
④ ものごとを論理的な視点から捉える力

21 Ⅱ
① 波ではないと思われるふしもある
② 波はうそであると思われる
③ 粒子だと思われるふしもある
④ 粒子はうそであると思われる

問四 傍線部1「こういう時期」とあるが、それはどのような時期か。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

22
① 世の中のことがらが不合理なものとして自らの知性で捉えられるようになると、それがいかなる原因によって生じたかを徹底的に探究したくなる時期。
② これまでは当然のこととして素直に受け入れていた世の中の約束事が必ずしも絶対的なものではないのを知り、何事も疑ってかかろうとする時期。
③ ものごとを論理的に、そして客観的に考える力が身についてくると、世間に見られる道理の通らないことに対して挑戦するようになる時期。
④ 自分の頭でものを考えられるようになると、世の中のことはすべて間違っているように感じられ、誰に対しても不遜な態度を取るようになる時期。

問五 傍線部2「理由があるということは、それが正当化されるということと同じではない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

23

① 世の中に不合理と思われることが存在する理由はいくらでも挙げられるが、そのことと不合理が存在することとは分けて考えなければならないということ。

② 世の中に不合理なことが存在していることには、それなりの理由があることを認めるが、だからといってその存在が直ちに容認されるわけではないということ。

③ 世の中には不合理なことがたくさん存在しているが、それをどのようにしたところで、その不合理が道理にかなっているように見せることはできないということ。

④ 世の中に不合理が存在するのは否定することのできない事実であるが、その一方で、その不合理を肯定することができないというのも、もう一つの事実であるということ。

問六 傍線部3「自分の心の奥底から洗われたようなすがすがしい気持になる」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

24

① 「カラマゾフ兄弟」とは、これまでの文学作品にはなかった、どうしようもない人物を登場人物とした作品であるが、そういった人物たちも裏を返せば崇高さを持ち合わせていることを証明した作品だから。

② 「カラマゾフ兄弟」はうそばかりつく困った人たちがひきおこす事件を描いた作品であるが、読者である自分の心にも同じような悪があり、作品を読むことでそれが善きものに昇華される思いを味わったから。

③ 「カラマゾフ兄弟」は実際に自分の周りにいたら困らされるであろう人々を描いた作品であるが、あえてそういった人物を描くことで、人間がどれほど大きな創造力を発揮できるかを示した作品だから。

④ 「カラマゾフ兄弟」は一見したところ人間の悪事を描いた作品のように見えるが、実は人間がそのように生きざるを得なかったやむにやまれぬ事情をするどい洞察力で描き切った作品であるから。

問七 傍線部4「知性がまだ気づかずにいる潜在意識の働きが、そこではしばしば決定的な意味を持ちうるのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

25

① 人間世界において最も大事な問題は、人間の幸福であり、それは人間の知性の背後にある感情や情緒などの領域に大きく左右されうるということ。

② 人間の幸福の問題に対して知性が貢献できる部分というのは限られているから、知性は自らを深め成長することを目指すべきであるということ。

③ 知性による人間精神の創造的活動は、人間に感銘を与えるものであり、そこから人間の幸福へとつながる可能性が見出されるということ。

④ 人間が何を幸福と感じるかは人それぞれであるが、知性によって人間の感情や情緒を解明できれば、幸福の問題にも寄与できるということ。

問八 傍線部5「新鋭の武器を持った野蛮人」の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

26

① 知性の深化によって裏づけられた科学の探究を通じて、世界に向けて科学の重要性を発信しようとする科学者。

② 科学が人間世界に対してどのような影響をもたらすかを考慮せず、科学の発展のみを目指す利己主義者。

③ 人間の幸福の問題について考えながら、自己の信念にもとづいた科学的探究を極めようとする専門家。

④ 科学の進展ということを無条件に信じ、科学によって人間世界のすべてを明らかにできると断言する学者。

Ⅲ 次の文章は阿仏尼という女性が少女時代を回想した日記『うたたね』の一節で、病気になった作者が療養のために宿所を移ろうとする時、失恋して訣別した青年が乗った牛車と出会う場面を描いたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

其比心地例ならぬことありて、命も危ふき程なるを、ここながらともかくもなりなばわづらはしかるべければ、思ひかけぬ便りにて、愛宕の近き所にて、はかなき宿り求め出でて、移ろひなんとす。かくとだに聞えさせまほしけれど、Ⅰ問はず語りもあやしくて、泣く泣く門を引き出づる折しも、先に立ちたる車あり。Ⅱ前華やかに追ひて、御前などことごとしく見ゆるを、誰ばかりにかと目留めたりければ、かの人知れず恨み聞ゆる人なりけり。顔しるき随身など、紛ふべうもあらねば、かくとは思し寄らざらめど、そぞろに車の中恥かしくはしたなき心地しながら、今一度それとばかりも見送り聞ゆるは、いと嬉しくもあはれにも、さまざま胸静かならず。遂にこなたかなたへ行き別れ給程、いといたう顧みがちに心細し。

かの所(注1)に行着きたれば、かねて聞きつるよりも、あやしくはかなげなる所のさまなれば、いかにして耐へ忍ぶべくもあらず。暮果つる空の気色も、日頃に越えて心細く悲し。宵居すべき友もなければ、あやしく敷きも定めぬ十符(注2)の菅菰に、ただ一人うち臥したれど、解けてしも寝られず。

はかなしな短き夜半の［　　］結ぶともなきうたたねの夢

（注）1 かの所 ――「愛宕近き所」の仮住居。
2 十符の菅菰 ―― 粗末な敷物。

問一 傍線部X・Y・Zの意味として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

27 X「便り」
① 縁故
② 手紙
③ 順番
④ 方法

28 Y「しるき」
① 目印となる
② 書き留めた
③ はっきりわかる
④ 霊験のある

29 Z「解けて」
① 髪を整えて
② 紐を解いて
③ 仕事をやめて
④ 安心して

問二 傍線部Ⅰ・Ⅱの現代語訳として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

30 Ⅰ「問はず語りもあやしくて」

① 質問しないでいきなり話すのは失礼なので
② 訊(き)かれもしないのに話すのも妙だと思い
③ 聞かないでいるのも自分から語るのも変な気分で
④ 他人が問わないことは自分でも説明しにくくて

31 Ⅱ「前華やかに追ひて」

① 列の前の派手な人々を追って
② 花やかな前駆の人に従って
③ 先払いの声も花やかに
④ にぎやかな先導者を追い掛けて

問三 波線部「嬉しくもあはれにも」からは、作者のどんな心境がうかがわれるか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

32

① 病気療養のための転居の途中で、別れた恋人の乗った牛車を見送ることが出来て嬉しかったが、今後の自分の容態を不安に思っている。
② 別れた恋人との偶然の再会は嬉しかったが、自分は病気のため顔を合わせることが出来ず、悔しい感情がこみ上げてきている。
③ 転居して病気療養に専念できるのは嬉しいが、恋人の乗った牛車を見てしまうと、元の所に留まっていたい気持ちも捨てきれないでいる。
④ 病気療養に専心し、訣別した恋人のことは恨むほどにしか思っていなかったが、その恋人と偶然再会すると、以前の恋愛感情が蘇(よみがえ)り胸が騒いでいる。

問四 文中の作者の不安と**異なる感情を述べたもの**として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

33

① 心地例ならぬことありて、命も危ふき程
② そぞろに車の中恥かしくはしたなき心地
③ あやしくはかなげなる所のさま
④ 宵居すべき友もなければ

問五 空欄に入れる語句として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

34
① 草枕
② 朝露
③ 雲隠れ
④ 旅衣

問六 傍線部a～dの「なる（なり・なれ）」の中で一つだけ品詞の**異なるもの**として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

35
① 程なるを（a）
② 人なりけり（b）
③ はかなげなる所（c）
④ さまなれば（d）

問七 阿仏尼の『うたたね』以外の作品を、次の中から一つ選びなさい。

36
① 土佐日記
② 十六夜日記
③ 蜻蛉日記
④ 更級日記

国語の問題はここまでです。